

平成26年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成26年8月～12月)のポイント

対象魚種：スルメイカ

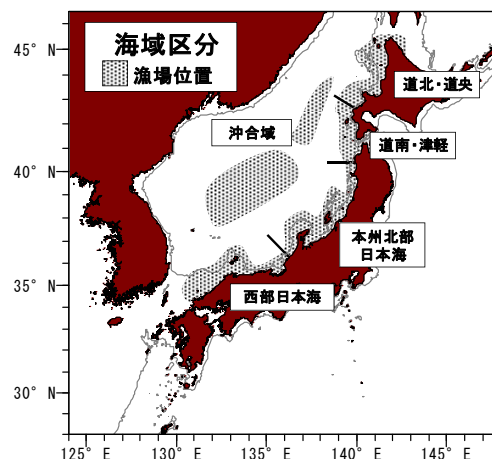
対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り漁業・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

- (1) 来遊量：前年及び近年平均を上回る。
- (2) 漁期・漁場：
 - ・道北・道央及び道南・津軽では8月～9月は高水温によって漁場が沖合化する。
 - ・本州北部日本海及び西部日本海では近年同様に好漁場が形成されにくい。
 - ・沖合域においては、8月は大和堆周辺、9月～10月は北海道沖に漁場が形成される。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

* 近年は最近5年間(平成21年～平成25年)



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 梶脇、影沼澤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

担当：関根、檜山

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>

平成26年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2014年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：近年平均及び前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：8月～9月は高水温によって漁場が沖合化。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：近年平均及び前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：8月～9月は高水温によって漁場が沖合化。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

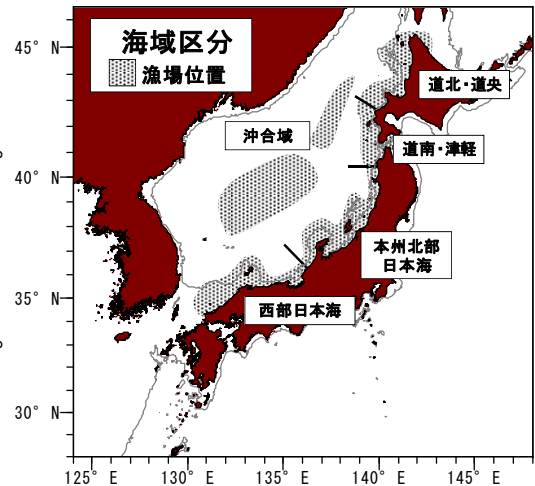
- (1) 来遊量・漁況：近年平均及び前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：今年も近年同様に漁場が形成されにくい。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：近年平均及び前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：今年も近年同様に漁場が形成されにくい。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

5. 沖合域（いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：近年平均及び前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：8月は和歌山周辺、9月～10月は北海道沖に漁場が形成。
- (3) 魚体の大きさ：近年平均並み。



* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）。

* 近年平均は最近5年間（2009年～2013年）の平均、前年は2013年を示す。

I 予報の説明

2014年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月下旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（平成26年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、及び漁期前半（9月まで）の海況予報（平成26年度 第2回 日本海海況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を以下の通りに予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

この海域では近年、7月～8月と11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半はオホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群が主な漁獲対象となる。

【情報及び調査結果】

日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、今年の当海域の分布状況は外套背長17cm～18cm台及び19cm～20cm台のサイズを中心に道央～道北海域で前年及び近年平均よりも多かった。一方、今年6月の当海域の漁獲量は前年を上回り近年平均並みであった。漁期後半に当海域に来遊する冬季発生系群の来遊量は前年並みと予測されている。なお、今期前半（9月まで）の表面水温は、かなり高めと予測されている。

【予報の説明】

6月の漁獲量は近年平均並みであり、日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、当海域への秋季発生系群の来遊量は前年及び近年平均よりも多かった。また、漁期後半の太平洋からの来遊量も前年並みと予測されている。そのため、対象期間全体としての来遊量は前年及び近年平均を上回ると予想される。ただし、8月～9月は表面水温が高いと予測されており、漁場が沖合化する見込み。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

この海域は近年、7月に漁期のピークがある。さらに、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群を対象に11月～12月にもう一つ漁期のピークが出来る場合がある。近年、6月～8月の漁獲量は減少傾向にある。

【情報及び調査結果】

今年6月の当海域の漁獲量は前年及び近年平均並みであった。日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、資源量指数が前年及び近年平均よりも多かった。漁期後半に当海域に来遊する冬季発生系群の来遊量は前年並みと予測されている。なお、今期前半（9月まで）の表面水温は、かなり高めと予測されている。

【予報の説明】

6月の漁獲量は前年及び近年平均並みであり、日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、秋季発生系群の資源量指数は前年及び近年平均よりも多かった。また、漁期後半の太平洋からの来遊量は前年並みと予測されている。そのため、対象期間全体としての来遊量は前年及び近年平均を上回ると予想される。ただし、8月～9月は表面水温が高いと予測されており、漁場が沖合化する見込み。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

この海域では近年、5月～7月が漁期の中心であり、8月以降に好漁場が形成される状況にない。

【情報及び調査結果】

今年の当海域の漁獲量は、5月は近年平均を上回ったものの、6月は近年平均を下回った。日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、資源量指数が前年及び近年平均よりも多く、当海域の分布密度も前年よりも高かった。なお、今期前半（9月まで）の表面水温は、かなり高めと予測されている。

【予報の説明】

漁場一斉調査結果では、資源量指数が前年及び近年平均よりも多く、当海域の分布密度も前年よりも高かった。しかし、今期前半（9月まで）の表面水温は、かなり高めと予測されているため、今期も近年同様、好漁場が形成される状況にないと予想される。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

この海域では、5月～6月に沿岸域を北上する群の他、10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は水温の高い季節には沿岸域に魚群が来遊しにくく、秋季発生系群の南下群が漁獲対象となる10月～12月は漁獲量が伸びない傾向がある。

【情報及び調査結果】

日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、資源量指数が前年及び近年平均よりも高かった。今期前半の水温は平年よりも、かなり高めと予測されている。

【予報の説明】

漁場一斉調査結果では、資源量指数が前年及び近年平均よりも高かった。しかし、今期前半（9月まで）の表面水温は、かなり高めと予測されている。そのため、近年同様、小型イカ釣りの主漁場となる沿岸域では今期も好漁場が形成されにくいと予想される。

5. 沖合域（いか釣り）

沖合域では従来、7月～12月にかけて大和堆付近が主漁場であり、水温の高い8月下旬～9月には北海道沖の武蔵堆付近にも漁場が形成されてきた。しかし、近年は漁場が北偏化するとともに漁期が遅れ、8月～11月は主に北海道周辺海域に漁場が形成され、大和堆付近では11月～12月のみに漁場が形成される年が多くなっている。

【情報及び調査結果】

日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では資源量指数が前年及び近年平均よりも高かった。道北海域では外套背長17cm～18cm台及び19cm～20cm台のサイズ、大和堆付近では外套背長21cm以上のサイズを中心に分布密度の高い調査点が多かった。また、漁期後半に当海域に來遊する冬季発生系群の來遊量は前年並みと予測されている。

【予報の説明】

日本海における資源量指数が前年及び近年平均を上回り、漁期後半に來遊する冬季発生系群の來遊量も前年並みと予想されていることから、当海域では対象期間全体としての來遊量は前年及び近年平均を上回ると予想される。なお、大和堆付近における大型個体の分布密度が高かったことから、8月は大和堆付近にも漁場が形成される見込み。さらに、北海道周辺では小型個体の分布密度が高く、これらを対象として9月～10月は北海道周辺海域が主漁場となると予想される。

II 予報に用いた主要な情報及び調査結果

1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、イカ釣りによる試験操業（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた。

1) 分布状況（図1）

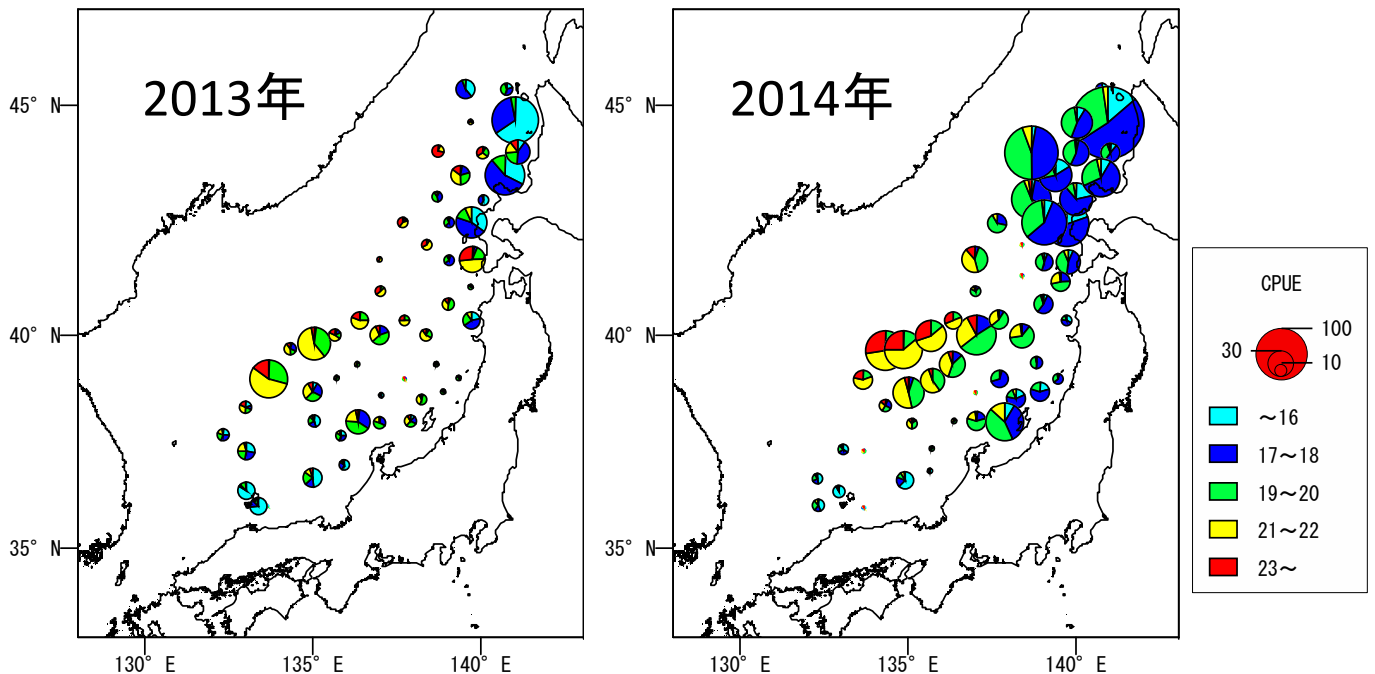


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況（2013年と2014年の調査結果）

図中●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示し、各色は各外套背長範囲（cm台）の比率を示す。

- (1) 道北・道央海域では、外套背長17cm台～18cm台及び19cm台～20cm台の小型サイズを中心に採集された。分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）が50尾以上の高い調査点が多く、CPUEが100尾以上の非常に分布密度の高い調査点もあった。
- (2) 道南・津軽海域でも道北・道央海域同様に、外套背長17cm台～18cm台及び19cm台～20cm台の小型サイズを中心に採集された。分布密度の指標となるCPUEが20尾前後の調査点が多いものの、CPUEが50尾以上の分布密度が高い調査点もあった。
- (3) 本州北部では外套背長16cm台以下、及び17cm台～18cm台の小型サイズが中心に採集された。分布密度の指標となるCPUEが20尾前後の調査点が多かったものの、CPUEが50尾を超す分布密度が高い調査点はなかった。
- (4) 西部日本海では多くの調査点で分布密度の指標となるCPUEが10尾未満であり、分布密度が低かった。採集された個体も16cm台以下の小型サイズが中心であった。
- (5) 沖合域では、大和堆付近を中心にCPUEが50尾以上の分布密度が高い調査点が多かった。採集された個体は、他の海域と異なり、21cm～22cm台及び23cm台以上の大型サイズが中心であった。

2) 資源量指数

日本海漁場一斉調査において、イカ釣りによる試験操業を行った全調査点のCPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）の平均値を日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数とした。資源量指数は、1970年代後半は15尾前後であったが、1980年代に低下し、1980年代半ばには5尾前後の低い値となった。しかし、その後は上昇に転じ、1990年代には10尾～20尾となった（図2）。資源量指数は2000年前後に20尾を超えたものの、2003年以降はやや低下し、2013年まで15尾前後で推移している。

2014年はCPUEが50尾を超える分布密度の高い調査点が多く、資源量指数は過去最高の29.34尾となった。この値は、前年（14.12尾）及び近年平均（16.17尾）の約2倍である。

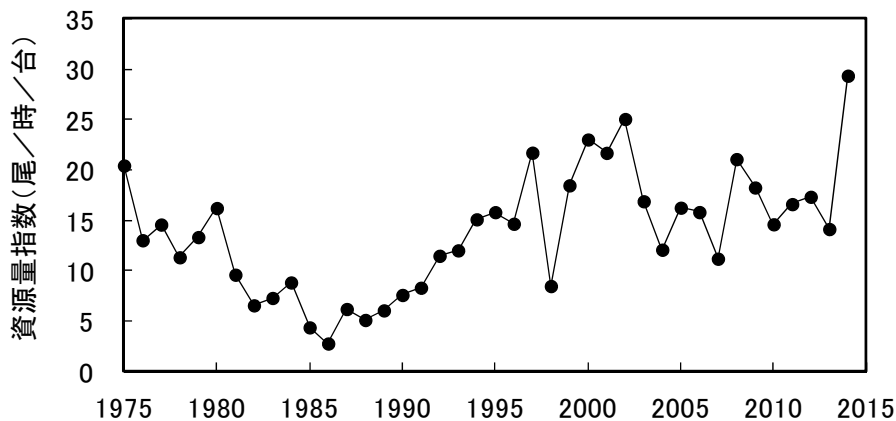


図2 日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数の変化

3) 魚体の大きさ

資源量指数で重み付けした外套背長組成を図3に示す。2014年は、近年平均同様に18cm台にモードがある組成であった。外套背長15cm以下のサイズは前年及び近年平均よりも少なかったものの、外套背長17cm以上のサイズは前年及び近年平均よりも多かった。特に外套背長17cm台～19cm台は近年平均の2.2～2.7倍であった。

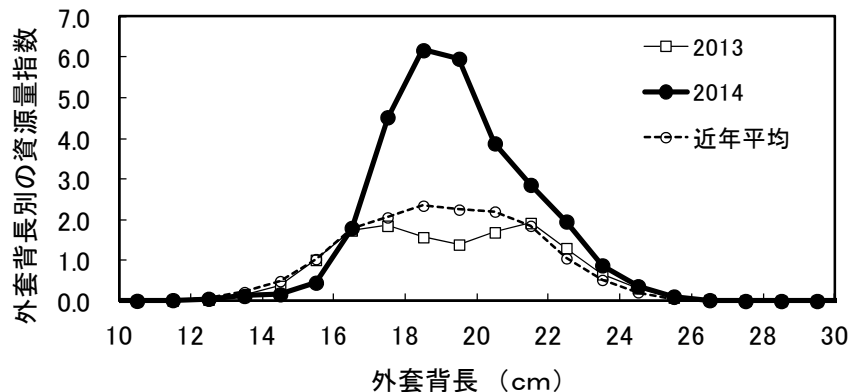


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す。

2. 2014年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2014年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。5月～6月の主漁場である本州北部では、5月の漁獲量は近年並みであったものの、6月の漁獲量は前年及び近年平均を下回った。西部日本海では、6月の漁獲量が前年及び近年平均を下回った。一方、道北・道央及び道南・津軽海峡では、漁期開始直後は不振だったものの、その後、漁獲量が回復し、6月の漁獲量は近年平均並みとなった。

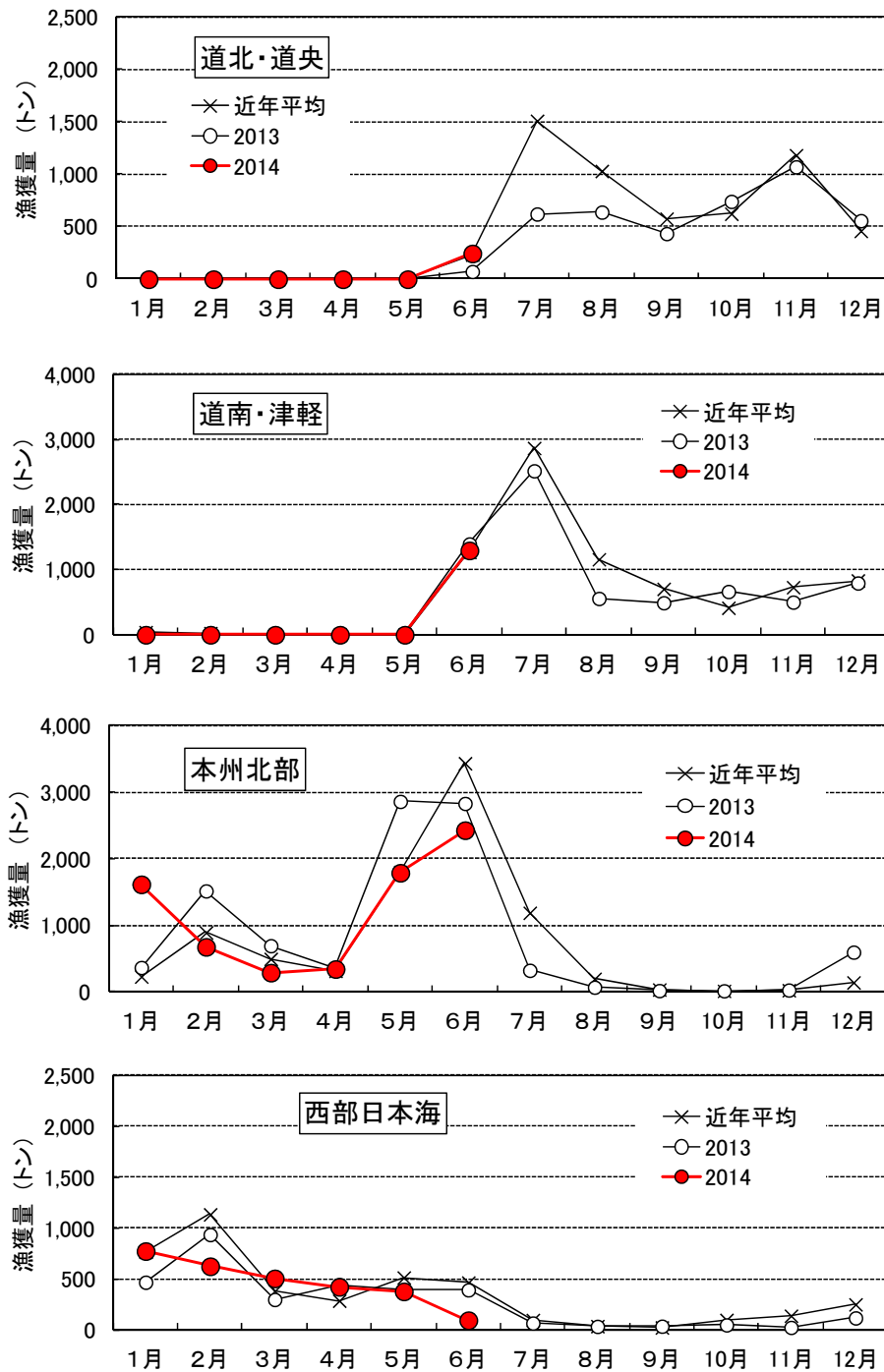


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量 (トン)

各道府県試験研究機関及び漁業情報サービスセンターの資料より作成 (一部未集計)。

3. 太平洋側 (冬季発生系群) の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡及び津軽海峡を經由して日本海に来遊する。そのため、太平洋側の冬季発生系群の分布状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成26年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報によると、太平洋側の冬季発生系群の来遊状況は全体として前年並みと予測されている。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
	(取りまとめ機関)
	独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所